

実践研究事業

教員として必要な資質能力の育成に寄与する教育事業の在り方

～「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」の実践研究を通して～

報告書

踏み出せば自分が変わる



令和7年3月

独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立大洲青少年交流の家

目次

- I はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
- II 事業概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
- III 令和5年度事業内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
- IV 令和6年度事業内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 10
- V 専門家の知見（愛媛大学教職総合センター准教授高橋平徳氏）・・・・・・ 16
- VI 実践研究成果と今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22



昭和49年11月に開所した国立大洲青少年交流の家は、今年度開所50周年の節目の年として、数々の記念事業を実施しました。そのうち、11月の記念式典では、元法人ボランティアで現在松山市立垣生小学校教諭の糸野紗依さんが、来賓・参列者150名の前で青少年代表メッセージを發表しました。「進んで前に出たり、何かに主体的に取り組んだりしたことがなかった」という糸野さんは、「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」に参加し、挑戦し・励まし合い・喜び合い・生き生きと活動する子供たちの姿を目の当たりにした。子供たちと共に挑戦の一步を踏み出したことで未来がよい方向に変わった。子供たちを支援、成長を共に喜び合える教員になりたいと強く思って今に至った。」と御自身の経験を言葉にしました。本事業に関わった大学生が、リーダー村での学びをその後のキャリア形成に役立てたエピソードとして力強く語っていただいたことを嬉しく思うと同時に、本事業が生み出す価値の偉大さ、尊さを改めて感じる一幕でした。

近年、教師の長時間勤務の問題や、教員採用選考試験の倍率の低下、「教師不足」などが一体の問題として取り沙汰され、教職全体がいわゆる「ブラックな職業」であるとの印象を持つ学生も少なくない中、18年目を迎えた「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」においては、「教員として必要な資質能力の育成に寄与する教育事業の在り方」を命題として実践研究を積み重ねてまいりました。子供たちの人格の完成を目指し、その成長を促すという非常に重要な職責を担っている高度専門職である教員には、「豊かな人間性」「使命感」「責任感」「教育的愛情」「人権意識」「倫理観」「社会性」等の素養が必要であり、関連して、「マネジメント力」「コミュニケーション力」「ファシリテーション能力」「他者と連携協働する力」「学び続けようとする意欲」などの力が横断的な資質として重要であるとされています。本事業の企画・実施に関わった学生さんたちは、悩み、苦しみ、失敗し、考え、調整し、議論し、チャレンジし、喜び、達成感を分かち合い、子供と涙するなど様々な経験をする中で、教員としての素養や能力を着実に高めることができたと言えそうです。そして、「踏み出せば自分が変わる」ことを体感した学生さんたちが、本事業での学びを今後のキャリア形成に役立てていただけるものと信じています。本報告書において、令和5・6年度の事業内容を中心に令和3年度から4年間の実践研究の成果を報告させていただきます。御一読いただき、多くの教育関係者に御活用いただきますようお願いいたします。

結びに、国立大学法人愛媛大学をはじめ、大洲市、西予市の関係機関並びに伊予の伝承文化体験のために場や機会を提供していただいた関係者の皆様におかれましては、本事業の運営に御理解と御協力を賜り、深く感謝を申し上げます。今後も未来を担う学生や子供たちのために温かい御支援と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和7年3月

独立行政法人国立青少年教育振興機構

国立大洲青少年交流の家 所長 中尾 治司

1 研究のテーマ

教員として必要な資質能力の育成に寄与する教育事業の在り方
～「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」の実践研究を通して～

2 実践研究の背景

「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」(以下「リーダー村」)は、愛媛大学との共催により平成19年度に始まり、今年度で18回目の開催となる(令和2年度は、新型コロナウイルス感染症の感染防止のために中止)。その間、社会の情勢は大きく変わったが、依然として体験活動が青少年教育指導者の養成や青少年健全育成に重要な役割を果たしていることは、当機構の調査研究より明らかである。リーダー村も「地域に根ざして活動するリーダーの養成」をねらいとし、教員や青少年教育指導者をめざす大学生を対象に、これからの教員に求められる資質や能力を養成できる事業となるように改良を重ねて実施している。

令和3年1月の中央教育審議会答申では、「令和の日本型学校教育」を担う教師の姿は「①環境の変化を前向きに受け止め、教職生涯を通じて学び続けている②子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師としての役割を果たしている③子供の主体的な学びを支援する伴走者としての能力も備えている」と示されている。そこで、令和3年度から、これまでの成果を活かして上記の研究テーマを設定し、愛媛大学の高橋准教授や日野教授と連携して、実践研究を開始した。令和6年度は、第4期中期目標期間の4年目にあたり、令和3～6年度の実践研究を踏まえて報告書を作成する。

3 実践研究事業概要

(1) 事業名

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村～「子どもむかし生活体験村」の企画・運営・直接指導を通して～

(2) 対象者

教員や青少年教育指導者をめざす大学生

(3) 事業のねらい

教員を志す大学生が、「子どもむかし生活体験村」(以下「体験村」)(小学4年生～6年生対象)の企画・運営・直接指導に携わることで、教員に必要な資質能力を身に付けることに寄与する。

(4) 連携する機関・研究者名

- ・国立大学法人愛媛大学(准教授 高橋平徳氏・教授 日野克博氏・元教授 山崎哲司氏)
- ・松山東雲女子大学 ・広島国際大学 ・愛媛県教育委員会社会教育課 ・大洲市 ・西予市

(5) 日程の概要

令和3年度		令和4年度	
日程	プログラム	日程	プログラム
10/13(水)	オンラインによるガイダンス	7/20(水)	ガイダンス
11/20(土)	「生活体験村」の企画	8/16(火)	「生活体験村」の企画
11/21(日)	「生活体験村」の準備	8/17(水)	「生活体験村」の企画
11/27(木)	「生活体験村」(1日目)の運営	8/18(木)	「生活体験村」の準備
11/28(金)	「生活体験村」(2日目)の運営	8/19(金)	「生活体験村」(1日目)の運営
		8/20(土)	「生活体験村」(2日目)の運営
		8/21(日)	「生活体験村」(3日目)の運営

令和5年度		令和6年度	
日程	プログラム	日程	プログラム
7/19(水)	ガイドンス	7/17(水)	ガイドンス
8/22(火)	「生活体験村」の企画	8/20(火)	「生活体験村」の企画
8/23(水)	「生活体験村」の企画	8/21(水)	「生活体験村」の企画
8/24(木)	「生活体験村」の準備	8/22(木)	「生活体験村」の準備
8/25(金)	「生活体験村」(1日目)の運営	8/23(金)	「生活体験村」(1日目)の運営
8/26(土)	「生活体験村」(2日目)の運営	8/24(土)	「生活体験村」(2日目)の運営
8/27(日)	「生活体験村」(3日目)の運営	8/25(日)	「生活体験村」(3日目)の運営

令和3年度から令和5年度までは新型コロナウイルス感染症等の影響により、コロナ禍前のプログラムから大幅に内容を変更していた。令和6年度からはコロナ禍以前のプログラムも取り入れ、より地域の豊かな教育資源（人材・自然・文化等）を活用できるようなプログラムにした。さらに、広島国際大学の学生も参加するようになり、より多くの学生がこの事業に関わるようになった。



令和5年度 教育事業(指導者等養成研修事業)

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村(17年目)

1 事業概要

大学生は、前半の3日間でリーダーシップや小学生への接し方、集団作りの技法、伝承文化等について学んだ。後半の日程では、小学生が参加する「子どもむかし生活体験村」の企画・運営を担当した。そして、後半の3日間を小学生とともに過ごす中で、リーダーとしての資質を身に付け、活動を通して伝承文化を小学生に伝えることができた。



2 事業の目的(ねらい)

地域を大切に、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験を融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育む。また、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3 企画のポイント

①事前にオンラインで講義を受講することで日程を短縮して「子どもむかし生活体験村」の準備時間を確保すること、②交流の家を宿泊場所とし、交流の家やその周辺地域の素材(自然・文化・人材等)を用いて伊予の伝承文化を学ぶことを企画のポイントとした。②については、肱川の水運や大洲の郷土料理に着目し、学びを深めるための体験活動として、カヌーや芋炊き作りに挑戦するプログラムを企画した。

4 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
国立大学法人 愛媛大学

5 後 援 愛媛県教育委員会 大洲市教育委員会

6 期 日 令和5年8月22日(火)～27日(日)
※大学生を対象とした参加者講習会を7月19日(水)に実施
※子どもむかし生活体験村は8月25日(金)～27日(日)に実施

7 場 所 国立大洲青少年交流の家

8 参加人数 大学生15名
〔子どもむかし生活体験村 小学校4～6年生18名(募集人数20名)〕

9 講 師

白石 尚寛 氏(大洲市立博物館 学芸員) 山崎 哲司 氏(愛媛大学元教授)
日野 克博 氏(愛媛大学教授) 高橋 平徳 氏(愛媛大学准教授)
浦辻 隆幸 氏(愛媛県教育委員会 社会教育課)
中野 好清 氏(大洲地区広域消防事務組合消防署員)
玉井 義幸 氏(国立大洲青少年交流の家研修指導員)
国立大洲青少年交流の家 職員

10 日 程

	7月19日(水)	8月22日(火)	8月23日(水)	8月24日(木)	8月25日(金)	8月26日(土)	8月27日(日)
6:30			起床・清掃・つどい	起床・清掃・つどい	起床・清掃・つどい	起床・清掃・つどい	起床・清掃・つどい
7:30			検温等・朝食	検温等・朝食	検温等・朝食	検温等・朝食	検温・朝食
8:30			カヌー(自然体験活動)			カヌー	退所点検
9:00			※荒天は所内で普通遊び体験	普通遊び体験・生活体験村の準備	受入れ準備	(荒天:普通遊び)	思い出発表準備
9:30		受付・検温	平水	(23日荒天でカヌーができなかった場合は、24日も荒天の場合は、26日に小学生と初めてカヌーに乗る。)		平水	
10:00		開村式(リーダー村)	艇庫前→うかいレストプラザ	はカヌー。24日も荒天の場合は、26日に小学生と初めてカヌーに乗る。)	開村式(生活体験村)	艇庫前→うかいレストプラザ	思い出発表
11:00		アイスブレイク	川遊び		アイスブレイク	川遊び	閉村式(生活体験村)
12:00		昼食	昼食(弁当)	昼食	昼食	昼食(弁当)	昼食
13:00		普通救命講習Ⅰ	うかいプラザ→緑地公園	生活体験村の準備	班のきまり・係決め	うかいプラザ→緑地公園	閉村式(リーダー村)・リフレクション
14:00			カヌー片付		きまり発表・ベッドメイキング	*カヌー片付は運送会社職員	解散
15:00			着替え(肱南公民館)		うちわ作り	着替え(肱南公民館)	
16:00	16:20~	うちわ作り	歴史体験活動(大洲城)			歴史体験活動(大洲城)	
17:00	ガイダンス	つどい	つどい	つどい	つどい・検温等	つどい	
17:30		検温等	検温等・夕食	検温等・夕食	野外炊飯(芋炊き)	検温等・夕食	
18:00		野外炊飯(芋炊き)	講義	生活体験村の準備		キャンドルサービス	
19:00			キャンドルサービス			思い出発表準備	
20:00					入浴	入浴	
21:00		入浴	入浴	入浴	就寝(小学生)	就寝(小学生)	
22:00		リフレクション	リフレクション	リフレクション	リフレクション	リフレクション	
22:30		情報交換会	就寝	就寝	就寝(大学生)	就寝(大学生)	
23:00		就寝					

11 活動内容

〈第1日〉8月22日(火)

「アイスブレイク」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

「子どもむかし生活体験村」で行われる「仲間づくりゲーム」での指導方法を学んでもらうため、グループワークゲームを行い、大学生参加者の緊張をほぐした。活動が進むにつれて、徐々に参加者の笑顔が広がっていった。



「普通救命講習Ⅰ」

講師：中野 好清 氏(大洲地区広域消防事務組合消防署員)

大学生は、心肺蘇生法やAEDの使用法、熱中症にならない対策や熱中症になった際の対応方法などを学び、緊急時の対応について理解した。また、全員が真剣な表情で、実技にも一生懸命に取り組んだ。



「うちわ作り」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

「子どもむかし生活体験村」で、大学生が小学生にうちわ作りを指導するため、その技術を習得しようと全員が熱心に取り組んでいた。また、指導する際に落ち着いてできるような時間設定や声掛けなどについても学ぶことができた。



「野外炊飯（芋炊き）」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

大洲市の芋炊きの歴史に触れ、小学生が野外炊飯をする際にどのようにして安全面に気を付けて実施をすれば良いのかを考えながら活動した。楽しみながらも、小学生がいることを想定しながら意見を出し合い、真剣に取り組んだ。



〈第2日〉8月23日（水）

「カヌー（平水）」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

午前中のカヌー研修では、カヌーの運び方や平水でパドルの使い方、カヌーツーリングでの笛による指示の仕方、及びリバーサインについて確認した。始めは、個人でのカヌーの操作に苦労していた様子であったが、時間が経つにつれ、他の学生と会話をしながら笑顔でカヌーを操作することができていた。



「川遊び」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

河原では、小学生が楽しく安全に活動できる遊びを考えた。当日は熱中症対策も必要という視点から、大学生は川の中の生物観察や座っての水切り、石集めなど、体力の消耗が少ない活動を準備していた活動を準備していた。



「カヌー（ツーリング）」

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

午前中のカヌー研修で学んだことを生かしながらカヌーツーリングを実施した。カヌーの操作だけでなく、歴史的建造物の少彦名神社や臥龍山荘、大洲神社、大洲城などに加え、河原の様子や野鳥、魚などを見て小学生に何を伝えるのかを意欲的に学んだ。



「歴史体験活動」

講師：白石 尚寛 氏（大洲市立博物館 学芸員）

大洲城の見学では、城や周辺の歴史などについて学んだ。大洲城探索では、お城周辺の特徴について見て回り、城内では建物の特徴や歴史について資料と照らし合わせながら詳しく説明を受けた。



「ボランティア活動の意義」

講師：浦辻 隆幸 氏（愛媛県教育委員会 社会教育課）

企画するときのポイントや小学生に興味を持たせる手法などについて講話をしていただいた。参加者は、時間に余裕を持ったプログラム構成や小学生の実態に合わせた内容にしなければならないと感じていた。また、小学生に説明するときには、どのように伝えれば分かりやすく伝えることができるか、どのようにすれば小学生が興味を持つかなど具体的に考えることができた。



「キャンドルサービス」

講師：玉井 義幸 氏（国立大洲青少年交流の家 研修指導員）

キャンドルサービスの構成や楽しむための手法について玉井氏より学んだ。厳かな雰囲気や楽しむ場面を区別するためのポイントを具体的に体験しながら学ぶことができた。



〈第3日〉8月24日（木）

「昔遊び・生活体験村の準備」

講師：高橋 平徳 氏（愛媛大学准教授）、国立大洲青少年交流の家 職員

各役割担当で話し合いながら準備を進めた。その際、小学生の目線に立って考えたり、大学生役と子供役に分かれて役割演技したりするなど、意欲的に準備に取り組む姿が見られた。



〈第4日〉8月25日（金）

「子どもむかし生活体験村」開村式・アイスブレイク」

大学生が、開村式やアイスブレイクの進行を行った。アイスブレイクでは、担当者以外の学生も積極的に小学生と関わり、緊張をほぐし、子供たちの表情が豊かになっていくのを感じた。



「班のきまり・係決め・きまり発表」

各班での目標を立てた。大学生は小学生から思いや言葉を聞き、班全員の思いを画用紙にまとめた。大学生の支えがあり、小学生は発表の時にしっかりと班のきまりを発表することができた。発表前には、大学生が小学生に発表のポイントをアドバイスしたり、発表時に優しく見守ったりする姿が見られた。



「うちわ作り」

大学生がうちわの作り方について準備していた資料を使って小学生に指導した。班の仲間で協力してうちわ作りを進める過程で話も弾み、時間とともに打ち解けていく様子が見られた。特に、うちわに描くイラストを大学生と小学生が相談しながら決めていく姿は、見ていて微笑ましかった。



「野外炊飯（芋炊き）」

野外炊飯場を利用して芋炊きを作った。大学生は事前に学んだことを生かしながら感染予防にも気を付けて、子供たちと楽しく調理をしていた。また、食材を切る係やかまど係などの役割分担をして協力して取り組んだ。美味しい芋炊きを作るため、小学生と大学生が積極的にコミュニケーションを取り、調理に励んでいた。



〈第5日〉8月26日（土）

「カヌー（平水）」

カヌーの運び方や平水でのパドルの使い方、カヌーツーリングでの笛での指示の仕方、及びリバーサインについて確認した。大学生は、班員の小学生の行動を観察しながら的確にアドバイスし、小学生は楽しくカヌーを操作することができていた。



「川遊び」

当日は熱中症対策に留意して、座ってできる遊びや川の中の生物観察など、小学生に体を休めることを意識した活動を選択している学生が多く見られた。大学生が進んで小学生の体調管理や安全に気を付けて活動していることがうかがえた。



「カヌー（ツーリング）」

午前中に学んだカヌーの操作を生かしながらカヌーツーリングを実施した。カヌーの操作だけでなく、友達と会話をしたり、歴史的建造物や景観などを見て楽しくツーリングしたりすることができた。長距離を移動するため、大学生が小学生を励ます場面が多く見られた。



「歴史体験活動（大洲城）」

学芸員の白石氏から学んだことを小学生に分かりやすく説明したり、問題形式にしたりして大洲城までの道のりを楽しんだ。大洲城では、班活動をして一緒に場内を巡った。大学生と小学生は同じ目線で見学し、外の景色を楽しんだり、城内に大工が遊び心で製作したテントウムシやネズミを見付けたりする活動にも取り組んでいた。



「キャンドルサービス」

玉井氏からいただいたアドバイスを基に、プログラム担当者だけでなく、他の学生たちも協力して入念な準備を行った。本番が始まると、厳かな雰囲気を作ったり、場を盛り上げたりして楽しい一時を過ごすことができた。大学生と小学生がみんなで楽しい時間を作り、蝋燭の火を囲んで一つになることができた。



〈第6日〉8月27日（日）

「思い出発表」

担当の大学生リーダーが司会を務め、思い出発表を行った。小学生が各班で思い出を発表し、他の班の小学生や大学生、保護者が発表を聞いた。小学生は、生き生きとした表情で、印象に残った活動内容や班全体の成果などを発表した。



「閉村式（子どもむかし生活体験村）」

代表の小学生が3日間の感想を発表し、村長（所長）が挨拶した後、大学生が閉村式を締めくくろうとした時、小学生から大学生へのサプライズが行われた。前日の夜に大学生が振り返りを行っている間に練習した、歌と感謝の色紙が大学生に贈られた。会場にいた保護者の涙も誘い、3日間の共同生活が締めくくられた。



「閉村式（リーダー村）」

大学生がリーダー村での感想を発表し、愛媛大学職員、交流の家職員、OBなどが感想を述べた。大学生の感想から、想像していた以上の感動体験をすることができ、そこから学ぶことがたくさんあったことが伺えた。閉村式後にも、大学生が一丸となって片付けを行い、5泊6日でより積極的に行動したり、意見を出し合ったりする姿が見られるようになったと感じた。



12 参加者の声

参加者の事後アンケートの結果

【大学生】 *満足：100% *やや満足：0% *やや不満：0% *不満：0%

- 子どもが楽しんでいる様子を見られて嬉しかった。自分にとってもたくさんの学びがあった。
- しんどい部分もあったが、自分を成長できるいい機会になりました。
- とても勉強になった5泊6日でした。貴重な経験をありがとうございました。

【小学生】 *満足100% *やや満足：0% *やや不満：0% *不満：0%

- 全部すごくおもしろかった。楽しかった。(10歳・女子)
- 初めての体験をたくさんできた。(11歳・女子)
- カヌーが一番楽しかった。(10歳・男子)

13 事業の成果

本年度は、事前に大学側と開催日程を調整したことで、参加する学生15名を確保できた。そのうち、過年度の経験者5名を上級者とする体制がとれたことで、スムーズな運営につながった。プログラムにおいては、「子どもむかし生活体験村」の準備時間を十分に確保したことで、学生がそれまで学んだ知識や技法をしっかりと確認しながら、主体的に準備や運営に携わることができた。また、毎晩リフレクションを実施することで、学生が個々のめあてや課題を明確にでき、一人ひとりが楽しみながらもそれぞれの課題に真剣に向き合うことができた。満足度100%のアンケート結果や学生の感極まる感想の数々からも、成果の多い事業であったといえる。

14 事業の課題

本事業は、大学と青少年教育施設が連携して実施しているモデル事業である。来年度も、愛媛大学との連携を密にし、参加する学生にとってより教育効果の高い事業にしたい。特に、伝承文化を学び伝える側面の強化を図るため、コロナ禍前に利用していた茅葺き民家「土居家」の活用を検討したい。また、夏期の実施のため、暑さ対策を万全にし、体調不良者を極力出さないプログラム設定に努めたい。

(担当：企画指導専門職 二宮啓)

令和6年度 教育事業(指導者等養成研修事業)

伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村(18年目)

1 事業概要

大学生は、前半の3日間でリーダーシップや小学生への接し方、集団作りの技法、伝承文化等について学んだ。後半の日程では、小学生が参加する「子どもむかし生活体験村」の企画・運営を担当した。そして、後半の3日間を小学生とともに過ごす中で、リーダーとしての資質を身に付け、活動を通して伝承文化を小学生に伝えることができた。



2 事業の目的(ねらい)

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験を融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育む。また、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3 企画のポイント

事前にオンラインで講義を受講することで日程を短縮して「子供むかし生活体験村」の準備時間を確保すること、交流の家を宿泊場所とし、大洲市や西予市周辺地域の素材(自然・文化・人材等)を用いて伊予の伝承文化を学ぶことを企画のポイントとした。学びを深めるための体験活動として、芋炊き作りやうちわ作り、川遊び、史跡巡りに挑戦するプログラムを企画した。

- 4 主催** 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家
国立大学法人 愛媛大学
- 5 後援** 愛媛県教育委員会 大洲市教育委員会 西予市教育委員会
- 6 期日** 令和6年8月20日(火)~25日(日)
※大学生を対象とした参加者講習会を7月17日(水)に実施
※子どもむかし生活体験村は8月23日(金)~25日(日)に実施
- 7 場所** 国立大洲青少年交流の家 大洲市 西予市
- 8 参加人数** 大学生19名
〔子供むかし生活体験村 小学校4~6年生29名〕
- 9 講師** 白石 尚寛 氏(大洲市立博物館学芸員) 山崎 哲司 氏(元愛媛大学教授)
日野 克博 氏(愛媛大学教授) 高橋 平徳 氏(愛媛大学准教授)
大本 敬久 氏(愛媛大学地域協働推進機構准教授)
木之本義道 氏(瑞龍寺住職)
久保 晴輝 氏(大洲地区広域消防事務組合消防署員)
国立大洲青少年交流の家 職員

10 日 程

	7月17日(木)	8月20日(火)	8月21日(水)	8月22日(木)	8月23日(金)	8月24日(土)	8月25日(日)
6:30			起床・清掃	起床・清掃	起床・清掃	起床・清掃	起床・清掃
7:00			つどい	つどい	つどい	つどい	つどい
7:30			朝食	朝食	朝食	朝食	朝食
8:00			土居家へ移動			土居家へ移動	退所準備
8:30					受入れ準備		退所点検
9:00		受付		大洲史跡めぐり			大洲史跡めぐり
9:30		開村式(リーダー村)		・臥龍山荘	開村式(体験村)		・臥龍山荘
10:00		アイスブレイク	歴史体験活動	・如法寺で座禅体験	アイスブレイク	土居家見学	・如法寺で座禅体験
10:30							
11:00		担当決め	着遊び体験・川遊び準備		班のきまり・係決め	着遊び	
11:30		うちわのり付け					
12:00		昼食	昼食(土居家 食堂)	昼食	昼食	昼食(土居家 食堂)	昼食
12:30							
13:00		普通救命講習Ⅰ	川遊び・見学	生活体験村の準備	きまり発表	神社・川へ移動	思い出発表準備
13:30					うちわ・竹とんぼ作り	着遊び・川遊び (※雨天時は室内遊び)	思い出発表
14:00							開村式(体験村)
14:30							
15:00							
15:30			着替え(センター)			着替え(センター)	開村式(リーダー村)
16:00	16:20～	うちわ仕上げ・竹とんぼ作り	交流の家へ移動			交流の家へ移動	リフレクション
16:30	ガイダンス				ベッドメイキング		解散
17:00		つどい		つどい	つどい		
17:30		野外炊飯		夕食	野外炊飯		
18:00			夕食			夕食	
18:30				生活体験村の準備			
19:00			生活体験村の準備			思い出発表準備	
19:30							
20:00		ちょうちん行列	リフレクション		ちょうちん行列	リフレクション	
20:30		リフレクション		リフレクション	リフレクション	リフレクション	
21:00		入浴	入浴	入浴		入浴	
21:30					入浴	入浴	
22:00							
22:30		就寝	就寝	就寝	就寝	就寝	

11 活動内容

〈第1日目〉8月20日(火)

「アイスブレイク」 講師：国立大洲青少年交流の家 職員

「子供むかし生活体験村」で行われる仲間づくりゲームでの指導方法を学んでもらうため、国立大洲青少年交流の家職員が講師となり、アイスブレイクを行った。活動が進むにつれて参加者の笑顔が増え、交流を深めることができた。



「普通救命講習Ⅰ」 講師：久保 晴輝 氏(大洲地区広域消防事務組合消防署員)

心肺蘇生法やAEDの使用方法、怪我などの応急処置、熱中症への対策等について学んだ。参加者は、緊急時に即座に対応できるように真剣に取り組んでいた。また、今回の教育事業中に起こり得る場面を想定し、その対応方法についても講師に質問をすることができた。



「うちわ作り」 講師：国立大洲青少年交流の家 職員

大学生は小学生にうちわ作りを指導する上で、どのような点に気を付けて指導をするべきかを考えながら作成をした。小学生が作成の過程でつまずきやすいポイントを想定し、つまずいた場合の手立てや声掛けなどについても協議をした。



「野外炊飯（鯛めし・芋炊き）」 講師：国立大洲青少年交流の家 職員

愛媛県の郷土料理である鯛めしと芋炊きの歴史に触れ、小学生にどのように伝えるかを考えた。また、安全管理面でどのような事前準備や指示をすればよいかも協議をした。初めて野外炊飯を行う学生が多かったが、手際よくおいしい鯛めしと芋炊きを作ることができた。



「ちょうちん行列」 講師：国立大洲青少年交流の家 職員

各班一つずつ提灯を持ち、星空を眺めたり、蠟燭の歴史について学んだりしながら所内を歩いた。大学生は、小学生が夜道を安全に歩くために、どのようなルール設定をすればよいか考えた。



〈第2日目〉8月21日（水）

「歴史体験活動（土居家見学）」 講師：大本 敬久 氏（愛媛大学地域協働推進機構准教授）

西予市野村町惣川にある「土居家」や惣川地区の歴史について、講師の大本氏からプレゼン資料の説明や館内案内を通して学んだ。土居家は四国最大級の規模の茅葺き木造民家であり、大学生はその歴史と大きさに感動をしていた。さらに、土居家について学んだことをどのように工夫をし、小学生に分かりやすく伝えるかを考えた。



「昔遊び体験」 講師：国立大洲青少年交流の家 職員

土居家の屋内や屋外でできる昔遊びを体験した。全員で伝承遊びを行ったり、個別でけん玉などの昔遊びを行ったりした。大学生は初めて経験する遊びもあり、楽しみながら体験をしていた。また、小学生が来たときにどのような場を設定し、小学生に体験させるかを考えた。



「川遊び体験」 講師：国立大洲青少年交流の家 職員

河原で小学生が安全に楽しく活動できる遊びを考えた。水が苦手な子供がいることも想定し、浅瀬で遊べる生物観察や水鉄砲遊びなどの活動も提案することができていた。また、フィールド内の危険箇所についても共有することで、小学生が安全に活動できるように計画を立てた。



「子供むかし生活体験村の準備」

本事業に対する子供や保護者、大学生の思いを再確認し、「村の掟」を作成した。それぞれの思いを入れつつ、誰もが分かりやすい掟を作成することができた。また、リーダーとしての心得についても話し合い、どのような心構えや態度で子供たちと接するかを再確認した。



〈第3日目〉8月22日(木)**「大洲史跡巡り(臥龍山荘)」** 講師：白石 尚寛 氏(大洲市立博物館学芸員)

臥龍山荘の歴史などについて、講師の白石氏から学んだ。山荘の美しさや名工の卓越した技術等、臥龍山荘の魅力を十分に感じ取ることができた。さらに、前日訪れた土居家と臥龍山荘は同じ茅葺き屋根となっており、その他の造りも似ているところが多数あることに気付いていた。

**「大洲史跡巡り(如法寺)」** 講師：木之本 義道 氏(瑞龍寺住職)

如法寺の歴史について、講師の木之本和尚に説明をしてもらった。室町時代から今に伝わる歴史ある寺院で、過去に何度も再建されて今に至っている。その歴史の深さを肌で感じる事ができた。さらに、国指定重要文化財である仏殿で座禅体験をしたり、庭園が見える和室でお茶体験を行ったりした。

**「子供むかし生活体験村の準備」**

各プログラム担当で話し合いながら準備を進めた。その際、小学生の目線に立って考えたり、大学生役と小学生役に分かれて役割演技したりするなど、意欲的に準備に取り組む姿が見られた。「ゴール設定」「相手ベース」「見える化」の3点を意識して準備を行った。定期的に他グループとも意見交換をすることで、よりよいプログラムとなっていった。

**〈第4日〉8月23日(金)****「子どもむかし生活体験村」開村式・アイスブレイク」**

大学生が開村式やアイスブレイクの進行を行った。開村式では、小学生の緊張をほぐすために、村長(所長)がサプライズで登場するというような演出を行った。アイスブレイクでは、担当以外の大学生リーダーも積極的に小学生と関わって緊張をほぐしたことで、小学生の笑顔がたくさん見られた。

**「班のきまり・係決め・きまり発表」**

各班の班名や目標を立てた。大学生は小学生から思いや言葉を聞き、班全員の思いを画用紙にまとめ、最終的には班旗を作成した。また、きまり発表では、各班が堂々と班名やきまりを発表することができた。発表前には、大学生が小学生に発表のポイントをアドバイスしたり、発表時に優しく見守ったりする姿が見られた。

**「うちわ作り」**

大学生がうちわの作り方について準備していた資料を使って、小学生に指導した。班の仲間で協力してうちわ作りを進める過程で話も弾み、時間とともに打ち解けていく様子が見られた。特に、作業が難しい過程では、大学生が小学生に寄り添いながら作業を進める姿は、見ていて微笑ましかった。



「野外炊飯（鯛めし・芋炊き）」

野外炊飯場を利用して、鯛めしと芋炊きを作った。大学生は事前に学んだことを生かし、小学生が安全かつスムーズに作業ができるように、指示や声掛けを行っていた。特に、包丁や火の扱いについては十分に事前指導を行っていた。おいしい鯛めしや芋炊きを作るため、小学生と大学生が積極的にコミュニケーションを取り、調理に励んでいた。



「ちょうちん行列」

各班一つずつ提灯を持ち、星空を眺めたり、初日の活動について話したりしながら夜道を歩いた。小学生は夜道を歩くという経験がほとんどなく、不安な気持ちもありつつも楽しみながら歩いていた。また、大学生が小学生の安全を気にしつつ歩く姿も見られた。



〈第5日〉8月24日（土）

「川遊び体験」

当初の計画では午後に行う予定だったが、午後が雷雨の予報となったため、急遽午前中に行った。事前に職員や大学生の配置を考えたり、小学生への指導方法を考えたりすることで、安全に実施することができた。また、大学生は常に小学生の体調や安全に気を付けながら活動していた。



「土居家見学」

土居家見学では、各班に分かれ、大学生が案内を行った。ただ案内するだけでは小学生が飽きてしまうため、クイズ形式にして行った。そのため、小学生は大学生の説明をしっかりと聞き、土居家への理解を深めることができた。



「昔遊び体験」

土居家で「はないちもんめ」等の伝承遊びやカルタや羽子板等の昔遊びを体験したが、雨が降ってきたため十分行うことができなかった。そのため、交流の家に戻り、ホールでできるけん玉やコマ回し等の昔遊びを行った。大学生が小学生に教えたり、逆に教えてもらったりするなど和やかな雰囲気で行うことができた。



〈第6日〉8月25日（日）

「大洲史跡巡り（臥龍山荘）」

臥龍山荘内を効率的に回るため、3グループに分かれて見学をした。それぞれのグループで大学生が建物の特徴や歴史について小学生にも分かりやすい言葉を選び、説明を行った。臥龍山荘の景観や肱川の美しさを味わいながら見学していた。



「大洲史跡巡り（如法寺）」

2グループに分かれ、お茶体験と座禅体験を行った。お茶体験では、大学生がお茶を点て、小学生に振る舞った。座禅体験では、仏殿の静寂の中、姿勢を正して座り、呼吸を整え、自己と向き合う貴重な時間を体験することができた。



「思い出発表」

担当の大学生リーダーが司会を務め、思い出発表を行った。小学生が各班で思い出を発表し、他の班の小学生や大学生、保護者が発表を聞いた。短時間での準備ではあったが、どの班も堂々と発表することができた。3日間の活動がとても充実したものだったということが伝わってきた。



「閉村式（子供むかし生活体験村）」

代表の小学生が3日間の感想を発表し、村長（所長）が挨拶した後、大学生が閉村式を締めくくろうとした時、小学生から大学生へのサプライズが行われた。前日の夜に大学生がリフレクションを行っている間に練習した、歌と感謝の色紙が大学生に贈られた。大学生も小学生も涙を流し合い、3日間の共同生活が締めくくられた。



「閉村式（リーダー村）」

大学生がリーダー村での感想を発表し、6日間の活動を振り返った。大学生の感想から、想像していた以上の感動体験をすることができ、そこから学ぶことがたくさんあったことが伺えた。初めは個の集まりだった大学生が、5泊6日の間にチームとなり、チーム一丸となって小学生と関わることができた。



12 参加者の声（事後アンケートの結果）

【大学生】 *満足：94.8% *やや満足：5.2% *やや不満：0% *不満：0%

- 自分を変えたい、経験を積みたいと思い参加した。予想以上によい経験となった。
- 人として責任ある行動を取ったり、みんなの前で堂々と発言したりできるようになった。
- 講義では教わることができない、貴重な経験をすることができた。

【小学生】 *満足93.2% *やや満足：6.8% *やや不満：0% *不満：0%

- 大学生が優しかった。友達もたくさんできた。(11歳・女子)
- みんなで協力しているいろいろなことをするのが楽しかった。(12歳・女子)
- 昔のことを体験することで、大学生や小学生と交流を深められた。(10歳・男子)

13 事業の成果

昨年度に比べ大学生も小学生も募集人数を大幅に増やしたが、多くの過年度経験者が運営に携わったことにより、スムーズに事業を進められた。また、昔体験をできるプログラムを多く取り入れたことで、この事業のねらいである「先人の知恵と自然体験を融合した体験活動」を存分に体験することができた。各プログラムでは、大学生が小学生に分かりやすく、楽しく伝えることができていた。これは、毎晩行ったリフレクションを基に、大学生が主体的に準備や運営に携わったことによるものだと考える。アンケート結果から、大学生も小学生も心に残り、実り多き事業であったといえる。

14 事業の課題

充実した事業であった反面、過密スケジュールだったため、参加者の中には体力的負担が大きく感じた方もいた。特に大学生は6日間という長期となる事業なので、ゆとりあるプログラムを検討する必要がある。また、夏季に行う教育事業のため、熱中症対策をさらに万全にし、体調不良者を出さないプログラム設定に努めたい。

(担当：企画指導専門職 岡本 和也)

「伊予の伝承文化を伝えるリーダー村」における成果 (令和3～4年度)

(※本稿は、以下論文から抜粋して再編集したものである。高橋平徳、日野克博、徳田義実、二宮啓、高木啓吾 (2023) with コロナ時代における学生宿泊型教育体験活動の試み—2021年度、2022年度「リーダー村」での活動より—。大学教育実践ジャーナル, 22.)

1. 研究の対象と方法

リーダー村の成果を検討するため、2021年度及び2022年度参加学生に対する質問紙を用いた記名式の事前事後アンケート調査を実施した。対象者は2021年度10名、2021年度15名である(回収率は両年とも100%)。事前調査は開村式、事後調査は閉村式の際に記入を依頼した。質問項目は、「これからの教員に求められる資質能力」として、2021年度段階では、リーダー村の目的、愛媛大学教職課程ディプロマ・ポリシーや、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」

(中央教育審議会, 2015)等での言及を踏まえた7項目である。2022年度では、中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して(中央教育審議会, 2021)での言及を踏まえ研究者間で検討して項目を追加し合計12項目とした。以上の項目について「とてもそう思う5, そう思う4, どちらともいえない3, そう思わない2, 全くそう思わない1」の5段階で回答を求めた(表1, 表2)。

また、参加学生に対して、事後アンケートと同時に、「リーダー村全体を通して成長を実感すること」についての自由記述を依頼した。さらに、2022年9月29日、10月3日に、2022年度参加の教育学部1年生4名に対して対面の30分から40分程度のインタビューを行った。また、2022年9月29日に、2021年度参加の教育学部卒業生(現職教員)に対してZoomを活用した30分程度のインタビューを行った。インタビューの内容は、「リーダー村から少し時間が経って成長を実感していること」や、「そう思える具体的なエピソード」等であり、協力者に許可を得て録音し、逐語録を作成した。

1-2. 分析方法

事前事後アンケートは、各項目についてのリーダー村開始段階(事前)と終了段階(事後)の平均点及び標準偏差を算出した。またリーダー村事前事後の得点の有意水準を検討するため対応のあるt検定を行った。そして、各項目

の事前事後の効果量(r)を算出した。

自由記述及びインタビュー調査での逐語録といった質的データは、回答の意味内容を読み取り、事前事後アンケートの各質問項目に沿って分類し代表的なものを抜粋した。以上の量的、質的データの検討によってリーダー村の成果を明らかにしていく。なお、本研究は、愛媛大学教育・学生支援機構研究倫理委員会の承認を得て実施された(受付番号22-001)。2021年度の前事後アンケートと自由記述についても倫理的配慮と個人情報保護について口頭と文書で説明し、研究協力への同意を得て実施した。

2. 結果と考察

2-1. 事前事後質問紙調査の結果

2021年度についての各項目の平均値と標準偏差は表1の通りである。項目2。「多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる」を除き、事前と事後で有意差があり($p<0.05$)、平均値が増加している。効果量(r)の値は、項目2については $r=0.36$ の効果量中で、その他の項目は0.67以上の効果量大を示していた。

2022年度の各項目の平均値と標準偏差は表2の通りで、全項目において、事前事後の得点に $p<0.5$ の有意差が認められ、平均値が増加していた。また、効果量(r)の値についても、全項目0.65以上で効果量大を示していた。

2-2. リーダー村の成果の考察

以下、事前事後調査結果をもとに、自由記述とインタビューでの言及も押さえながら考察していく。

2021年度は項目2を除き、事前と事後で有意差があり、平均値が増加し、効果量も大であったことは、1泊2日を2週に分けて実施した緊急的なプログラムでありながら十分学生の資質能力の育成に貢献できていると捉えることができる。

ただ、効果量中であった項目2については、子どもとかわる時間が2泊3日となった2022年度では、有意差があり平均値が大きく増加、効果量も大であった($r=0.81$)。このことから、子どもと適切なコミュニケーションがとる力が身についたと思えるには、2泊3日程度は子どもとかわる時間が必要であることが伺える。

項目「3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる」

表 1 2021 年度参加学生への事前事後質問紙調査の結果

項目	カテゴリ	Mean±SD	対応のある t検定	効果量 (r)
1. 子どもの育成を支援する教育の指導者に求められる役割について、具体的に述べるができる	事前	3.2 ± 0.6	p=.024	r = 0.67
	事後	3.8 ± 0.9		
2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる	事前	3.9 ± 0.5	p=.279	r = 0.36
	事後	4.2 ± 0.7		
3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる	事前	3.5 ± 0.9	p=.003	r = 0.80
	事後	4.3 ± 0.6		
4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる	事前	3.6 ± 0.8	p=.001	r = 0.86
	事後	4.5 ± 0.5		
5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる	事前	2.9 ± 0.8	p=.007	r = 0.76
	事後	4.0 ± 0.8		
6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる	事前	3.8 ± 0.4	p=.000	r = 0.91
	事後	4.8 ± 0.4		
7. 不明な点や困ったことがあれば、企画者（地域の方々や、職員、教員）に適切に質問や相談ができる	事前	4.1 ± 0.5	p=.010	r = 0.74
	事後	4.8 ± 0.4		

表 2 2022 年度参加学生への事前事後質問紙調査の結果

項目	カテゴリ	Mean±SD	対応のある t検定	効果量 (r)
1. 子どもの育成を支援する教育の指導者に求められる役割について、具体的に述べるができる	事前	3.3 ± 0.6	p=.000	r = 0.88
	事後	4.3 ± 0.6		
2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる	事前	3.7 ± 0.7	p=.000	r = 0.81
	事後	4.7 ± 0.4		
3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる	事前	3.2 ± 0.7	p=.000	r = 0.88
	事後	4.4 ± 0.5		
4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる	事前	3.6 ± 0.6	p=.000	r = 0.88
	事後	4.8 ± 0.5		
5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる	事前	3.2 ± 0.7	p=.000	r = 0.89
	事後	4.7 ± 0.4		
6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる	事前	4.1 ± 0.5	p=.000	r = 0.86
	事後	4.9 ± 0.3		
7. 不明な点や困ったことがあれば、企画者（地域の方々や、職員、教員）に適切に質問や相談ができる	事前	4.3 ± 0.4	p=.006	r = 0.65
	事後	4.8 ± 0.4		
8. 子どもの成長を支援するための体験活動を安全かつ効果的に指導することができる	事前	3.3 ± 0.8	p=.000	r = 0.87
	事後	4.7 ± 0.5		
9. 子どもの興味・関心・意欲を意識して、子ども一人一人の活動を支援することができる	事前	3.9 ± 0.5	p=.000	r = 0.89
	事後	4.9 ± 0.3		
10. 状況を判断しながら、臨機応変に対応することができる	事前	3.5 ± 0.6	p=.000	r = 0.89
	事後	4.7 ± 0.4		
11. 情報モラルを守り、必要に応じてICTを活用することができる	事前	3.4 ± 0.8	p=.003	r = 0.69
	事後	4.1 ± 0.7		
12. 施設の職員や地域の人々から学んだことを活かしてプログラムを企画することができる	事前	3.4 ± 0.6	p=.000	r = 0.86
	事後	4.7 ± 0.4		

については、以下のように、現在教員となっている参加学生から、学校現場でリーダー村での学びが生きていると感じているという言及があった。

- ・ 「リーダー村では学生同士で一つになっていきなり仲良くなって企画を考えていきますけど、大学の時にそういうことを経験しておく、集団宿泊学習とか地域と連携しながら行う行事の時に自分の中に経験したものがあるので、それを持って会議とかに参加できるので貢献しやすいと思っています。それに学校現場でも色んな年代の人がいる中で、うまくコミュニケーションを取って、自分が初任者なのでわからない事も沢山あって、そういう時にどうしたらいいかを聞きに行ったり、こういう案も提案できたり、学校全体でチームとして動く時に、リーダー村でいろんな人と連携でまたことがすごく役立ってるって思っています。」

2022年度については、全項目で効果量大であり、子どもとかかわる日数が2泊3日となったこと、参加者の多くが1年生であったことなども影響があるかもしれないが、量的データを確認するだけでも非常に学生の資質能力の育成に貢献できていることがわかる。

最も事後の値の平均が大きくなっているのは、項目「6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる」と、項目「9. 子どもの興味・関心・意欲を意識して、子ども一人一人の活動を支援することができる」の4.9であった。これは効果量についてもそれぞれ $r=0.86$ と 0.89 という高い値であった。自由記述やインタビューでもこの2項目については以下のように言及されている。

- ・ チームで協力することの大切さを心から実感することができました。今まで言葉では何度も口にしていたけれどその意味の本当の大切さを理解することができました。ほかの大学生メンバーと助け合いながら活動することで、子供たちに良い思い出を作ってあげることができたと思います。
- ・ 「お城あんまり興味ない、って子もいたんですが、お城に興味はなくてもクイズは好きということがあって、クイズ形式の活動に工夫して、楽しんでもらえてたからよかったと思います。」

教員を目指す学生が、メンバーとの協調といった協働的な学びを通して獲得できるであろう力や、子ども一人一人の興味・関心・意欲に寄り沿う個別最適な学びを支援する

力といった「令和の日本型学校教育」において求められる資質能力を身につけられたと強く感じられていることは、リーダー村での非常に大きな成果である。

2022年度で事後に値が最も大きく変化した項目は、「5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる」であった（事前3.2，事後4.7）。また「12. 施設の職員や地域の人々から学んだことを活かしてプログラムを企画することができる」も事前の値は小さくなっている（事前3.4，事後4.7）。これらの項目の事前の値が小さいのは、リーダー村で初めて学生自身でプログラムを計画する機会を得られたことに関係するかもしれない。自由記述やインタビューからは、時間や場所、人数のことなど頭に入れながら、何をすればいいのかを考えたり、学んだことを子どもたちに提供する際どう工夫すればよいか学べたとの言及が多くあった。こうした力を高めるためにも、学生自身でプログラムを計画する機会を提供していきたい。

その他、12の項目とは別に、リーダー村での活動を通して、子どもと関わる意欲、挑戦への意欲、教師のやりがいへの気づき、将来の目標の獲得、今後の大学生活の指針の獲得、体験学習の重要性の認識、宿泊型教育体験活動の意義など、学生は数多くの成果を獲得してくれていることが伺える言及が多くあった。一例を以下に挙げる。

- ・ 今回濃密な6日間の中で得たものは多すぎるが、一番はやっぱり目の前の子どもとまっすぐ向き合い褒めてあげると目に見えて子どもは成長して行くんだと実感した。こんな私たちがリーダーとして頼ってくれて、自分自身の自信にも直結したし、子どもの潜在能力からたくさんのお話を学ばせてもらった。本当に本当に参加して良かった。今までは躊躇しがちな部分もあったが今回とにかく何でも挑戦してみることを意識すると新しい扉を開けた気がした。これからも積極的に何事にも取り組んでいきたい。

3. おわりに

以上のように事前事後アンケートという量的データ、自由記述とインタビューという質的データの分析から、学生の「これからの教員に求められる資質能力」の育成に十分貢献できていることが明らかとなった。今後も「伊予の伝承文化を伝えるリーダー村」を改善しながら継続し、より学生の資質能力の育成に貢献できる活動にしていきたい。

「伊予の伝承文化を伝えるリーダー村」における成果 (令和5～6年度)

1. 研究の対象と方法

リーダー村の成果を検討するため、2023年度及び2024年度参加学生に対する質問紙を用いた記名式の事前事後アンケート調査を実施した。対象者は、リーダー村の全プログラムに参加した学生で、アドバンスクラス等でプログラムに一部参加した学生は除いている。

事前調査は開村式、事後調査は閉村式の際に記入を依頼した。質問項目は、「これからの教員に求められる資質能力」として、リーダー村の目的、愛媛大学教職課程ディプロマ・ポリシーや、中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（中央教育審議会、2015）、中央教育審議会答申「令和の日本型学校教育」の構築を目指して」（中央教育審議会、2021）等での教員の資質能力に関する言及を踏まえ研究者間で検討した12項目とした。各項目について「とてもそう思う5、そう思う4、どちらともいえない3、そう思わない2、全くそう思わない1」の5段階で回答を求めた。事前事後アンケートの両方を完了し分析対象とするのは、2023年度12名分（回収率92%）、2024年度19名分の回答である（回収率100%）。

また、参加学生に対して、事後アンケートと同時に、「リーダー村全体を通して成長を実感すること」についての自由記述を依頼した。

1-2. 分析方法

事前事後アンケートは、各項目についてのリーダー村開始段階（事前）と終了段階（事後）の平均点及び標準偏差を算出した。またリーダー村事前事後の得点の有意水準を検討するため、対応のあるt検定を行った。そして、各項目の事前事後の効果量（ r ）を算出した。

自由記述である質的データは、回答の意味内容を読み取り代表的なものを抜粋した。以上の量的、質的データによってリーダー村の成果を考察していく。

なお、本研究は、愛媛大学教育・学生支援機構研究倫理委員会の承認を得て実施されている（受付番号 22-001）。

2. 結果と考察

2-1. 2023年度事前事後質問紙調査の結果

2023年度についての各項目の平均値と標準偏差は表1の通りである。全ての項目で事前より事後の平均値が増加していた。項目10と11を除いたその他の10項目につい

て、対応のあるt検定で有意差があり（ $p<0.05$ ）、 $r=0.65$ 以上の効果量大であった。

最も効果量が高かった項目は、項目3。「チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる」で $r=0.90$ であった。

一方で、項目10。「状況を判断しながら、臨機応変に対応することができる」については、事前事後の値で有意差を認められず、効果量（ r ）は0.31で中であった。また項目11。「情報モラルを守り、必要に応じてICTを活用することができる」についても、事前事後の値の有意差を認められず、効果量（ r ）は0.17で小であった。

2-2. 2023年度リーダー村の成果の考察

まず、10の項目において、対応のあるt検定で有意差があり、効果量が大であったことについては、十分に学生の資質能力の育成に貢献できていると捉えることができる。

ただ、項目10。「状況を判断しながら、臨機応変に対応することができる」は、教員に求められる能力として非常に重要であるが、効果量が中にとどまっていた。効果量中でも十分な効果ではあるが、この理由を検討すると、2023年度でのカヌー体験で、雷等天候不良への対応や小学生の体調不良等への対応がなされたことにあると考えられる。

これらの対応は生命の安全に直結するため、国立青少年交流の家の職員や、カヌー指導者による判断がなされた。つまり学生自身に状況判断や臨機応変な対応を求めるには難度が高すぎ、学生自身ではうまくできなかったという自己評価になっているとも考えられる。

難しい判断や対応をしている現場を目の当たりにすることで、判断の基準や安全確保の方法を学んだり（項目8の効果量 $r=0.82$ ）、判断を行っている国立大洲青少年交流の家職員や地域住民であるカヌー指導者といった学校教員以外の専門家との連携・協働の意義と必要性を強く認識（項目3の効果量 $r=0.90$ ）したりすることができたのは非常に有意義であったが、学生自身の「状況を判断しながら、臨機応変に対応できる力」を育てるには、学生のレディネスを考慮しながら適切な難度の学生主体プログラムを提供していく必要があることが示唆される。

項目11。「情報モラルを守り、必要に応じてICTを活用することができる」についても、事前事後の値の有意差を認められず、効果量（ r ）は0.17で小であった。これも教員には必要な能力であるが、コロナ禍での2021年度や

表 1 2023年度参加学生への事前事後質問紙調査の結果

項目	カテゴリ	Mean±SD	対応のある t検定	効果量 (r)
1. 子どもの育成を支援する教育の指導者に求められる役割について、具体的に述べることができる	事前	3.6 ± 0.9	p = .001	r = 0.67
	事後	4.3 ± 0.4		
2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる	事前	3.8 ± 0.7	p = .001	r = 0.67
	事後	4.5 ± 0.6		
3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる	事前	3.4 ± 0.6	p = .000	r = 0.90
	事後	4.3 ± 0.7		
4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる	事前	3.4 ± 0.6	p = .000	r = 0.86
	事後	4.6 ± 0.5		
5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる	事前	3.2 ± 0.8	p = .000	r = 0.82
	事後	3.8 ± 0.8		
6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる	事前	4.3 ± 0.5	p = .002	r = 0.65
	事後	4.8 ± 0.4		
7. 不明な点や困ったことがあれば、企画者(地域の方々や、職員、教員)に適切に質問や相談ができる	事前	4.3 ± 0.5	p = .002	r = 0.65
	事後	4.8 ± 0.4		
8. 子どもの成長を支援するための体験活動を安全かつ効果的に指導することができる	事前	3.8 ± 0.8	p = .000	r = 0.82
	事後	4.4 ± 0.6		
9. 子どもの興味・関心・意欲を意識して、子ども一人一人の活動を支援することができる	事前	3.9 ± 0.8	p = .000	r = 0.73
	事後	4.6 ± 0.6		
10. 状況を判断しながら、臨機応変に対応することができる	事前	3.5 ± 0.9	p = .300	r = 0.31
	事後	3.8 ± 1.0		
11. 情報モラルを守り、必要に応じてICTを活用することができる	事前	3.5 ± 0.9	p = .059	r = 0.17
	事後	3.7 ± 0.8		
12. 施設の職員や地域の人々から学んだことを活かしてプログラムを企画することができる	事前	3.7 ± 0.6	p = .001	r = 0.72
	事後	4.4 ± 0.5		

表 2 2024年度参加学生への事前事後質問紙調査の結果

項目	カテゴリ	Mean±SD	対応のある t検定	効果量 (r)
1. 子どもの育成を支援する教育の指導者に求められる役割について、具体的に述べることができる	事前	3.3 ± 0.7	p = .000	r = 0.72
	事後	4.0 ± 0.6		
2. 多様な成長段階・教育環境の子どもに対して、適切なコミュニケーションをとることができる	事前	3.3 ± 0.7	p = .000	r = 0.84
	事後	4.4 ± 0.6		
3. チームとしての学校、学校と地域との連携・協働の意義について、具体的な例を挙げながら説明できる	事前	3.0 ± 0.7	p = .000	r = 0.85
	事後	4.2 ± 0.6		
4. 目的・目標に即して活動をふりかえり、適切な評価と改善案を列挙することができる	事前	3.2 ± 0.8	p = .000	r = 0.82
	事後	4.5 ± 0.5		
5. 状況を把握して柔軟にプログラムを組み立てることができる	事前	2.9 ± 0.7	p = .000	r = 0.80
	事後	4.2 ± 0.7		
6. プログラムの遂行を目指し、チームメンバーと協調することができる	事前	3.9 ± 0.6	p = .000	r = 0.78
	事後	4.8 ± 0.4		
7. 不明な点や困ったことがあれば、企画者(地域の方々や、職員、教員)に適切に質問や相談ができる	事前	4.2 ± 0.5	p = .004	r = 0.61
	事後	4.7 ± 0.5		
8. 子どもの成長を支援するための体験活動を安全かつ効果的に指導することができる	事前	3.3 ± 0.7	p = .000	r = 0.84
	事後	4.4 ± 0.6		
9. 子どもの興味・関心・意欲を意識して、子ども一人一人の活動を支援することができる	事前	3.7 ± 0.7	p = .000	r = 0.72
	事後	4.5 ± 0.6		
10. 状況を判断しながら、臨機応変に対応することができる	事前	3.4 ± 0.7	p = .007	r = 0.59
	事後	4.1 ± 0.7		
11. 情報モラルを守り、必要に応じてICTを活用することができる	事前	3.4 ± 1.0	p = .072	r = 0.41
	事後	3.8 ± 0.9		
12. 施設の職員や地域の人々から学んだことを活かしてプログラムを企画することができる	事前	3.4 ± 0.8	p = .004	r = 0.61
	事後	4.3 ± 0.6		

2022年度でICTを多く活用した活動と違い、2023年度リーダー村では全て対面で自然体験が多くできるプログラムであったためICT活用の機会が少なくこのような値になったことが考えられる。

学生の「リーダー村全体を通して成長を実感すること」についての自由記述では、「子ども預かっているという責任感や、自分の声掛けや指示でその後の行動が変わりうるのだと気づいた。どうすれば子どもの意欲を高める声かけができるか学んでいきたい」、「全体での進行やタイムスケジュールなど初挑戦が多くあった分、その経験が次の日に活かせるなど成長を感じた。周囲を見る力と心の余裕を身につけた」、「リーダー村では一人一人が前に立つ人、指示を出す人だったので、他の大学生のやり方や職員の方の真似をすることから始めて6日間活動してきたことによって、今では自分がという意識を常にもって行動できるようになったと感じた」と言及されているように、教職の責任感、学習への意思、挑戦への意欲、主体性の獲得と言えるような成果をもたらしていることが伺える。

2-3. 2024年度事前事後質問紙調査の結果

2024年度についての各項目の平均値と標準偏差は表2の通りである。全ての項目で事前より事後の平均値が増加していた。項目11.「ICT活用」を除いた11の項目について、対応のあるt検定で有意差があり、 $r=0.59$ 以上の効果量大であった。最も効果量が高かった項目は、2023年度と同じで、項目3の $r=0.85$ であった。項目2、4、5、8についても効果量が $r=0.8$ 以上であり非常に高くなっている。

2023年度で効果量が中であった項目10.「状況を判断しながら、臨機応変に対応することができる」については、2024年度では効果量 $r=0.59$ で大であった。一方、項目11については、2023年度と同様に事前事後の値の有意差を認められず、効果量(r)は0.41で中であった。

2-4. 2024年度の成果の考察

2024年度のリーダー村についても、全ての項目で事前より事後の平均値が増加しており、11の項目で対応のあるt検定で有意差があり、 $r=0.59$ 以上の効果量大であったように、非常に学生の資質能力の育成に貢献できていると捉えることができる。

2022年度、2023年度で実施したカヌー体験から、2024年度では土居家での活動や川遊び、寺院での坐禅や茶道など文化体験といったようにプログラムの変更を行なった

が、項目10についても効果量大の結果が得られたことから伺えるように、学生のレディネスに適切な難度の学生主体のプログラムが提供できていると考えることができるであろう。

項目11.「ICT活用」については、2023年度で効果量小であったため、意識して事前のeラーニング等で説明を追加したりしたが、効果量中にとどまっているため、子どもたちとの活動で学生がICTを活用できるようなヒントを与え助言するなどICT活用能力が高まるような工夫が必要であろう。

自由記述でも、「子どもたちのことを正面から考え抜く力がついた。さまざまな子どもたちがいる中でその子たちにどういう対応をしたら良いか、どういうプログラムにしたら良いかを全力で考えることができたと思う。一人一人のことを考えながら動くということを大事にしていきたい。また周りの人と互いに頼りながら活動できた。準備の時に困ったことは一人で抱え込まず誰かに相談したり一緒に案を出し合ったりして一人だけでなくみんなで作り上げることができた。」、「リフレクションを通して思ったことを共有し合い、問題を明らかにして解決することの大切さとそれを生かす力を得たと思います。また自分たち主体で行動するため、自分で考える力やそれを職員さんなどに確認する力も得ました」、「自分が自分の持てる力を全部出して、子どもたちと向き合うことで、子どもたちが返してくれるのだということを理解することができました。やっぱり子どもたちと一緒に泣いたり笑ったりできる教員はとても良い職業だと思いました」と言及があるように、教員の役割へ自覚、個別最適な指導の重要性、チームとしての協働、リフレクション、教職への意欲と言える成果をもたらしていることが伺える。

3. おわりに

以上のように事前事後アンケートという量的データ、自由記述という質的データの分析から、学生の「これからの教員に求められる資質能力」の育成にリーダー村は十分貢献できているとすることができるだろう。自然体験・文化体験の要素が強いリーダー村ではあるが、そういった中でもICT活用能力を高められる工夫を加えながら、今後も「伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村」を改善しながら継続し、より学生の資質能力の育成に貢献できる活動にしていきたい。

1. 実施の際に工夫した点

新型コロナウイルス感染症対策のため、令和3年度からオンラインを活用し、大学生には法人ボランティア登録に必要な講義を遠隔非同期型で事前に受講してもらっている。アフターコロナとなった令和5～6年度も事業当日の企画・運営の時間を十分に確保できるように遠隔非同期型による講義は継続している。

令和5年度は令和4年度からのプログラムを継続して行った。伊予の伝承文化の視点として、肱川の水運と郷土料理に着目し、大洲青少年交流の家で提供しているカヌーや、野外炊飯で芋炊き作りに挑戦するプログラムを企画したことで、学生たちが安全教育や食育について考える場にもなった。さらに、前年度に課題に挙がっていたアドバンスリーダー（前回のリーダー村の経験者で、リーダー村に新規参加する学生を育てていくリーダー）の確保をクリアすることができ、新規リーダーの育成にも繋がった。

令和6年度は前年度の反省から、伝承文化を学び伝える側面の強化を図るためにコロナ禍前に利用していた茅葺き民家「土居家」を活用したプログラムを取り入れた。さらには、大洲市内の歴史文化施設を訪れ、昔体験をできるプログラムを多く取り入れた。これらによって、この事業のねらいである「先人の知恵と自然体験を融合した体験活動」を存分に体験することができた。また、大学生も小学生も募集人数を大幅に増やしたが、多くの過年度経験者が運営に携わったことにより、スムーズに事業を進めることができた。

各プログラムの企画時間を十分に確保したことで、学生がそれまで学んだ知識や技法をしっかりと確認しながら、主体的に準備や運営に携わることができた。そのおかげで、大学生が小学生に分かりやすく、楽しく伝えることができていた。さらに、毎晩リフレクションを実施することで、学生が個々のめあてや課題を明確にでき、一人ひとりが楽しみながらもそれぞれの課題に真剣に向き合うことができた。

2. 実践研究成果

愛媛大学の高橋准教授の協力の下、教員として必要な資質能力として、令和3年度は7項目で調査を行っていたが、国立青少年教育振興機構青少年教育研究センターのこれまでの調査研究や「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（令和3年1月26日中央教育審議会答申）」などを参考に、5項目を追加し、12項目を設定し、令和4年度から12項目で調査を行っている。高橋准教授の報告にもある通り、ほとんどの項目において事業実施後に効果量大との結果が得られ、本事業が教員として必要な資質能力の向上に大きく貢献していることが分かった。

令和6年度に初めて参加した大学生へのアンケートでは、「工夫をして説明をしないと、子供たちが話を聞いてくれないことが分かった。」「子供たちの興味をひくためにどのような工夫をすればよいかを考えた。」等の回答があった。子供たちと3日間関わることで、講義だけでは分からない、子供たちの実態を把握することができていたようだ。アドバンスリーダーからは、「手助けをするとところと子供達だけでやらせるところを考えるようになった。」「困っている子供に最初から答えを教えるのではなく、しっかりと観察してアドバイスをするようにした。」「子供たちが自主的・主体的に動けるような声掛けをした。」等の回答があった。過去の経験を生かし、より子供たちが主体的に行動できるように工夫する姿が見られた。さらに、リーダー村を経験した現職教員にも学校現場でリーダー村での学びがどのように

生きているかとアンケートを行った。「行事の運営をする時の段取り、時間配分などがすぐに思いつくのは、経験させていただいたことが活かしている。」「連携の大切さを学んだので、教員同士のコミュニケーションを大切にしながら日々関わることができている。」「周りの教員と子どもや学校の情報を共有したり、分からないことは質問したりしながら、教育活動に取り組むことができている。」等、企画力や組織力に関する意見が多かった。これは、本事業で大学生リーダーがチームに分かれ、チームで協力して、企画や運営を行った経験が要因だと考えられる。チーム内での協力はもちろん、他のチームや職員、協力者などとの連携、共有をしないとうまくいかないことが多いため、このような力が身に付いたと考えられる。特に体験活動については、目的が非常に重要なため、目的を共有して、それぞれの役割を果たすことで、効果が高まることから、集団宿泊活動の引率等でも役に立ったという声もあった。

中央教育審議会は、令和3年の答申で「令和の日本型学校教育」の在り方と、それを担う教師及び教職員集団のあるべき姿を示している。その中で、教師は「子供一人一人の学びを最大限に引き出す」「子供の主体的な学びを支援する伴走者」などの役割があると示されている。高橋准教授の報告やアンケートの結果からも、リーダー村を経験することで、答申で示されている教師に必要な能力の素地を養ったり、組織やチーム内でコミュニケーションを取りながら協力する姿勢が身に付いたりしていることが分かる。以上のように、この事業が教員養成において大変有意義であると言える。

3. 今後の課題

これまでの調査の結果より、本事業がこれからの教員に求められる資質能力を育成するために有意義であることが分かった。これらの調査結果と現職教員の声から、今後この事業をさらに充実させていくために必要なことは以下の3つと考えられる。

1つ目は、子供たちが自主的・主体的に活動に取り組めるようにすることである。大学生リーダーが主体となってプログラムを進めることが多いことから、子供たちが受け身となる場面が見られた。子供たちが「もっと知りたい!」「もっとやってみたい!」と自主的・主体的にプログラムに取り組めるような企画や運営ができるように支援していきたい。2つ目は、大学生リーダーが子供の観察方法や子供との関わり方を学び、個に応じた指導ができるようにすることである。指導者は子供一人一人の興味・関心や特性、発達成長等を考慮し、それに応じた指導や声掛けをする必要がある。複数回参加した大学生はそれらを意識して子供と関わる姿が見られたが、初めて参加した大学生は十分にはできていなかった。リフレクションで重点的に話し合ったり、先輩リーダーから助言したりすることで、個に応じた指導ができる力を身に付けさせたい。3つ目は、ICT活用能力を高めることである。高橋准教授の報告にもある通り、学生に行った質問紙調査内の「情報モラルを守り、必要に応じてICTを活用することができる」について、過去2年間の調査では事前事後の値の有意差を認められていない。学校現場でICT教育が推進されている中、教員も子供もICT活用能力を高めることは必須である。事前の遠隔非同期型による講義を充実させたり、ICTを活用したプログラムを企画したりすることでICT活用能力を高めさせたい。

これらの課題を改善するに、現役教員による指導や助言を受けたり、相談できたりする体制を整え、学校現場や現在の子供達の実態を学ぶ機会を設ける。さらに、リーダー村だけでなく、他の教育事業でもボランティアがどのような役割や機会を経験すれば教員に求められる資質能力向上につながるかを明らかにすることで、今後の青少年教育施設におけるボランティア活動の推進に寄与していきたい。



独立行政法人国立青少年教育振興機構
国立大洲青少年交流の家

〒795-0001 愛媛県大洲市北只 1086 番地

TEL (0893) 24-5175 FAX (0893) 24-2909

URL: <https://ozu.niye.go.jp/>

e-mail: ozuzippy@niye.go.jp

体験の風を
おこそう

